

昭和時代の写真館

江戸時代中期から約260年の歴史を誇る八朔祭。

その伝統の中で、私たちが携わることのできるのは、ほんの一瞬です。

でも、その一瞬にも確かな歴史が息づいています。

懐かしい昭和時代の写真で往時のにぎわいを振り返ってみます。

そして、みなさんにもぜひ、八朔祭の思い出を刻んでいただきたいと思います。



昭和40年代と思われる通潤橋。

通潤橋は、今も昔も祭りのシンボル

上記写真は昭和40年代のちょうど八朔祭当日の通潤橋の放水を撮影したものと思われま。通潤橋の上には草が生え、ロープを張っただけの簡単な柵がしてあります。橋を渡るたくさん見物客の姿が見えます。農業用水路である通潤橋の放水は今も昔も、豊作を祈願する八朔祭のもう一つのシンボルです。



現在の八朔祭の通潤橋。豪快な放水は今も昔も変わらない。



舗装されていない通りは昭和30〜40年代の頃でしょうか。子どもたちが先頭を歩き、その後尾に大造り物が誇らしげに引かれています。



I N T E R V I E W

昔は大勢の子どもたちもおって、楽しかったですなあ。

25歳ころ矢部に帰ってきて写真館をはじめ、もう60年ぐらい経ちます。八朔祭は昭和24年ごろから大造り物の写真を中心に撮っています。自分でも造り物ばつくりよりしましたので、昔の写真を見るとその当時のことが浮かんできますね。これからも続いていってくれることを願って、体の動く限り写真を撮っていきたいと思います。



泊まりがけの見物客でそれは賑わいました。

昔は浜町に買い物に来るにも周辺部の方々は山や谷を越えて歩いて来るしかなく、多くの方が泊りがけで祭りに来よんはったですな。祭りのときは、昼夜もなく歌や三味線が町中から聞こえ、それは賑やかなもんでした。私も親父や近所のおじさん達が造り物を作るのを見て育ちました。この町の誰もがそうして大人になっています。



自分の体と気持ちが続く限りは作り続けたいと思いますね。

私の町内に限らず、浜町には昔から協力し合うという心が受け継がれているような気がしますね。だから、2か月も3か月もかかる大造り物の制作が続いているのではないのでしょうか。また、昔と違って今は共同作業の中でも責任分担と役割分担がきちんとできていて、それが大造り物の大きさや出来具合を格段にアップさせているようにも思えます。

